



羅針盤

安部 正敏

Masatoshi Abe

医療法人社団廣仁会 札幌皮膚科クリニック 院長,
Visual Dermatology 編集委員



いまさらに若々しき心地する糖尿病かな

本号は“糖尿病”の特集である。希少疾患や最新治療の情報を期待されている読者の先生方には“何をいまさら!”と思われるかもしれぬ。糖尿病は、誰しも学生時代時間を割いて勉強する疾患であり、当然国家試験の山中の山である。憮然とする先生方に、まず筆者の個人的体験から……。

「リポイド類壊死症疑い」として紹介されたその患者は、その非定型的な臨床所見から指導医の間で診断に議論が白熱した。筆者がまだ大学に奉職していた若手の頃の話である。とにかく生検を行うこととなり、筆者にそのお役目が回ってきた。患者との雑談の中、紹介元のクリニックの先生について「びっくりしました。一目見てなんだか難しい病名を言われて……そして大学に紹介するからって……」。果たして、多々挙がった鑑別診断の中、病理組織学的所見は見事リポイド類壊死症であった。ご紹介頂いた先生は混雑することで有名なクリニックの院長先生である。押し寄せる患者診察の多忙な中、非定型例でさえ一目で真実を見抜く眼力に驚愕したものである。と同時に、皮膚科専門医の卓越したスキルをみる思いであった。

貪欲に学ぶ若手の頃は、この疾患はマスターしたい! この疾患のエキスパートになりたい! との崇高な動機を持つものである。結果、それが自らのサブスペシャリティーへと繋がる。筆者も若かりし知識欲から、この患者のフォローを自ら買って出た。当然、その後の糖尿病の出現に注意せねばならない。時折、耐糖能異常の有無をチェックしたが、幸いこの患者は最後まで正常範囲内であった。無論、本症は糖尿病に関係なく発症する場合も多い。しかし、患者の告白では「最初にクリニックの

先生に糖尿病の注意を受けたので、ずっと節制していました」とのことであった。それが糖尿病に至らなかった要因かどうかは証明する術もないが、この症例は現在クリニック勤務である筆者をして皮膚科医の在り方を示唆する。我々皮膚科医は予防医学にも十分貢献できるスペシャリストであり、また一人一人がその重責を負う。

日常の皮膚科診療において、そうそう“アイカルディ症候群”や“ランドウ・クレフナー症候群”を有する患者に遭遇する頻度は地方ローカル線の列車以下である。他方“糖尿病”は東海道新幹線のごとく次々とやってくる。近年、糖尿病治療薬は格段に増え、その知識だけでもアップデートは必須であり、手軽にエッセンスを学ぶツールが求められよう。皮膚症状のみを知ればよい! という変な自信は、わが国の医療システムが急速に変化する中、皮膚科医の立ち位置を危うくしよう。他科の先生方とコミュニケーションを可能とする最低限の知識が、全人的医療を可能とし、結果、社会は皮膚科専門医を求めることとなる。

そこで本特集号では、まず“糖尿病の現状”を知るべく、エキスパートの先生方に平易な解説を頂いた。次に“糖尿病の皮膚症状”を復習した後、社会的関心の高い“糖尿病の足病変”を学ぶことで、明日からすぐに診療スキルアップに直結する内容を意図した。今回、ご多忙の中、御玉稿をご執筆頂いた著者の先生方に衷心より御礼を申し上げる次第である。

タイトル通り、“今さら若者扱いの感じがします糖尿病ですね”。紫式部はそういうかもしれぬ。しかし、若かりし学生の頃没頭した“糖尿病”に、案外“皮膚科専門医の卓越したスキル”習得のヒントがあるかもしれない。